

## 『上海都市社会生活史』を叙述するうえでの 三つの問題

銭 杭  
(井上 徹 訳)

### 要 旨

中国社会学界は、従来、農村及び各種の農村問題に関する研究領域において相当に分厚い研究成果を蓄積してきたが、都市問題に関する研究は比較的脆弱であった。現在、私は『上海社会生活史』という本を叙述する作業を進めているが、この作業はそうした研究状況を補完するうえで大変大きな学術的意義をもつものだと確信している。上海という都市の社会生活史は特殊な領域の研究であるが、多角的に考察することにより、歴史的に形成され、現在もなお継続的に発展し続けている上海の特性及び都市一般の特性を忠実に浮かび上がらせることができるであろう。また、この研究によって得られた理論的な枠組みや叙述の方式、資料活用の方法は、中国社会学界の研究に対しても、新たな知見を提供するものと信じている。

キーワード：上海，上海人，都市，社会生活，歴史

筆者が理解するところの、都市社会生活史を描写するうえでの基本原則に照らすならば、現在、叙述の作業に着手している『上海都市社会生活史』は主に三つの鍵となる問題に関連するであろう。三つの鍵とは、第一に上海という都市、第二に社会生活、第三に、歴史的变化である。

第一に、「上海という都市」である。この「上海という都市」は、一方では、私たちの社会生活史の地域範囲を規定し、他方では、その他の地域の都市社会生活史や上海の農村の社会生活史とは区別されるという基本的な特徴を規定している。これは、中国歴史発展の基本的な特徴とも符合している。中国学界とくに中国社会学界は、長期にわたって農村及び農村のなかに発生した各種の問題を検討することに多大なる努力を傾注し、関連する研究領域において、相当に分厚い学術的蓄積を積んできたが、都市問題に関する研究は相対的に弱かった。中国の

歴史上、繁華ではあるが病める王朝の都城<sup>1)</sup>を除けば、社会全体の都市化の水準は非常に低い。封建的な土地制度と意識形態の厳重な制約を受けたために、都市の数量はそれほど多くなかったし、都市人口も限られ、産業の形態も偏っており、発展と停滞が交差していた。すなわち、中国古代の都市文化の伝統には普遍的に長期、短期の中断現象が存在していたために、中国の都市文化の発育は十分ではなく、連続性にも欠けていた。また、上海の都市建設の歴史は千年に満たず、近代以降になって初めて本格的な発展が開始された。これにより、研究者が中国都市の社会生活の様々な問題にコンタクトしたのは農村問題のそれに比べて遅く、分析は少なく、認識も浅い。

そうした研究状況のなかで、上海都市社会生活史を研究する学術的な価値は極めて高いと考える。この特殊な領域に対する全面的な研究を

通して、私たちは歴史上の、及び更に継続的に発展するところの、「上海の特色」と「都市の特色」を描き出すことができるようにしなくてはならない。その理論方法と叙述の方式、資料の運用はまた、中国社会学の研究に対して新たな経験を提供することができるであろう。このことは言うまでもなく、その他の地域のその他の形態の社会生活をおろそかにすることを意味するものではない。

第二に、「社会生活」である。社会生活史の核心は当然「社会生活」である。それぞれの個人は孤立して生活しているわけではなく、各種の類型の集団に依存しており、その生活は社会のなかにある。この意義のうえにおいて、人類の全ての政治生活、経済生活、文化生活、宗教生活などは、すべて広い意味で、相互の間に密接な連繫をもつ社会生活としてみなすべきだ。ただし、私たちが言うところの「社会生活」は上掲の政治、経済、文化、宗教等を主要な内容とする生活とは区別されるべきであり、一つの専門的な範疇に属している。つまり「社会日常生活」である。

社会学の専門家の意見に照らすならば、社会日常生活に関連するところは極めて広く、個人、家族及びその他の社会集団の物質面・精神面における各種の消費性の活動を包括している。食事、衣服、住まい、家具、交通、レクリエーション、体育、社交、学習、恋愛、婚姻、風俗習慣、典礼儀式など広い範囲に及ぶのである。何人かの研究者は、主に人間関係の観点から「社会生活」を論証している。たとえばアメリカの学者であるピーター・M・ブラウは、明確に「社会生活」が内包するところに論及し、「社会生活を論じるということはとりもなおさず人と人との交際を議論することに他ならない」と述べている<sup>2)</sup>。またフランスの学者レヴィ・ストロースは家族の婚姻を「社会生活」の基本内容のなかに列ねた<sup>3)</sup>。実践的な見地から言えば、これらの研究の視角はやや狭隘であるかに見える。私たちは物質生活、精神生活、人間関係この三つの側面が互いに融合し、浸透しあうという視点から、上海市民の都市生活における豊かで多彩な日常生活を観察し、描き出さなくてはならない。

とても興味深い一つの現象がある。中国の学界において「社会生活」の基本定義を定める時に提示された従来の成果を整理するために、筆者は手元にもっているいくつかの専門的な工具書を調べたことがある。その結果、中国大百科全書出版社の1991年版『中国大百科全書・社会学』のなかで王雅林が執筆した「社会生活」の項目を除いて、1985年版『簡明ブリタニカ百科全書』（中国大百科全書出版社）、1986年版『新社会学詞典』（知識出版社）、1988年版『文化学辞典』（中央民族学院出版社）、1989年版『社会科学百科全書』（上海訳文出版社）、1991年版『人類学辞典』（上海辞書出版社）、1992年版『社会学詞典』（上海辞書出版社）などでは、意外にも「社会生活」の項目が見あたらない。それは工具書に限ったことではない。社会史の専門領域の事情もあまり変わらない。筆者が見た範囲では、馮爾康・常建華共著『清人社会生活』、馮爾康著『清人生活漫歩』と喬志強主編『中国近代社会史』など少数の著作が「社会生活」の概念について一定の理論的な考えと学術的実践を提示している他は、大多数の著名な社会史の専門著作は「社会生活」について単独の分類を設けることにあまり熱心ではない。

このことはもちろん人々が「社会生活」に関心がないということではなく、ある側面から説明されるべきである。学界が「社会生活」を組み込むことに系統的な関心を示してこなかったために、大多数の人々の中で、口に出して言うまでもなく、わざわざ議論することはないとみなして、真剣に把握しようと思わず、このため見落とされる事象が出てくることになったのだ。そうでなければ、どうして多くの権威ある工具書と著者が「社会生活」に対して厳格な学術的理論を画定しないのか理解しがたい。

一つの集中的に議論すべき問題がある。社会生活と個人の生活との関係である。これは社会生活史が何をどのように描くかということに関わる大きな問題である。社会はもとより個人によって構成されるが、社会の構成分子と社会の全体性は決して一つのことではない。この問題に関連して、人類の「社会行為」に関して行われたマックス・ウェーバーの分析は、社会生活

を研究する方法に対して一定の啓示を与えている。マックス・ウェーバーは五つの方向から社会行為に関する研究の筋道を述べている。第一に、社会行為は、一種の集団性の行為であり、集団性がサブカルチャー群を包括するという特徴を備えている。第二に、社会行為は広汎性という特徴を備えている。この広汎性は単に空間的に表現されるだけでなく、時間的なスパンも表現している。第三に、社会行為は可観察性の特徴をもっている。それは研究者が個人の内的理解と推理に頼って分析して得た結論ではなく、人々によってあまねくかつ繰り返し観察し体験されることによって得られた行為である。これはまた各種の手段を通して観察される。たとえば文献、映像、新聞報道及びその他のメディアによって記録し、描写されるものであり、これらは大衆によって受容され模倣される。第四に、社会行為は、一系列の代表性あるいは典型性を備えた方式を通して表現されるものであり、ある区域とある時間のなかにおける社会の傾向を集中的に反映している。第五に、社会行為は、公共性という特徴を具有する。それはまた個人の領域にも反映されるが、必ず個人と公共領域の関係の結節点に位置することを示していなければならない。マックス・ウェーバーは、以上五つの角度から社会行為を考察し、それによって社会行為を一般の社会成員の個体としての行為と理論的に区別した<sup>4)</sup>。

私はこの理論的枠組みを社会生活の研究領域にそのまま当てはめようとは考えていないが、認めざるを得ないのは、社会生活が社会行為の基本的特徴を確かに備えていることである。社会生活がある種の個人の生活を包括するのは、こういった種類の個人生活がその性質上、社会行為の範疇に属しているためである。L.H.モーガン、林耀華、陳国霜、ミシェル・マフェゾリ、イーファー・トゥアン、庄孔韶などの著作は、こうした視角を体現する古典的な研究モデルである<sup>5)</sup>。これは次のことを説明している。社会生活の研究対象となる個人の生活というものはまた、集団性、広汎性、可観察性、代表性と公共性という基本的な特徴を備えている。そうでなければ、私たちは理論的にこ

の問題に対して系統的な把握を行うことは難しく、また私たちの研究計画に可操作性をもたせることも難しい。もちろん理論的な枠組みは一つの分析の道具であり、それは研究者の実践のプロセスにおける積極的な創造を制限するものではなく、研究のプロセスが研究の原則よりも高い価値をもつという基本前提に違反するものでもない。研究者は社会生活に対するそれぞれの独自の理解を通して、すでに獲得されている一般の学術的見解に賛同し、あるいは個性に富む妥当な学術的定義を下し、しかるのち豊かで生き生きとした探索を進めることができるであろう。

第三に、「歴史」であり、それは歴史著作の問題である。歴史書というものは、編著者が担当する某巻某冊の歴史の方向に対して総体的な判断と把握を示すことを要求するものだ。これはまた、ある時期の上海の都市社会生活が、総合的な歴史背景のもとで、いかなる種類の特定の位置にあるのか、明確な認識を示すことが求められるのだ、と言い換えてもよい。この目標を実現するために、編著者は担当する巻冊の章節の配分や資料の取捨選択がその歴史の筋書きを適切に表現するものとなるように注意し、散乱した資料を無駄に飾り立てたり、不用意に連続させたりして、歴史の論理を見極めるのを軽視することを避けるようにしなければならない。これは歴史学者について言えば最低限の要求であるが、このことを軽んじる人も少なくないことを否定できない。これは当然避けなければならないことだ。血や肉や骨組みのある歴史著作は、明瞭にあるいは潜在的に著者の歴史観と基本的な価値観を表現するものである。

この点に関して、上海在住の作者として描写する『上海都市社会生活史』が、まさに鮮明に上海人と上海の都市発展の主要な価値を前向きに支持すべきものであることを指摘したい。上海人の姿は、国内外において醜く、またシンプルに描写されることが多い。人々は北京派の文化の気概を「大気」、上海派の文化を「小気」と呼び習わし、また上海人の欠点と弱点もまた、しばしばある種の人間を参考例として引き合いに出し「悪い根性」と指摘されるなど、

普遍的な諷刺を蒙っており、時にはそれは相当に酷薄でさえある。善意であるか辛辣であるかは別にして、上海人に対する評論はともに一定の事実に基づいており、自分が上海人であることを必ずしも後ろめたく思うことはないし、かといって感情的に議論する必要もない。上海人の各種の特徴は上海の都市の発展の変化のプロセスのなかで次第に形成されたものであり、多方面の複雑な要素をもっている。これは歴史分析を進めるうえでの一つの対象なのだ。研究者として中性的な描写と評価をなす以上、また鋭く批評すべきでもあるのだ。しかしながら、私は、それぞれが受け持った分担箇所の中で、上海人の歴史的な特徴に対して積極的な肯定を打ち出すべきことを希望している。私が思うに、生活や人生の価値に関して上海人が行う様々な選択は、彼らが身を置く都市の生態環境のなかであって、ベストであるかベターであるかという選択ではない。上海人と上海の学者が、積極的な態度をもって歴史に向かい合い、現状を描写し、未来を設計することは、自分で負うべき責務であり、道理にかなない無理のないものとするべきだ。これが「上海人」という歴史的に形成された集団に対する私の基本的な歴史評価である。私は努力して自己の著作のなかにその考えを体現するであろう。

上海の都市社会生活史に関する叙述は、大変意義のあることである。縦糸と横糸を織りなして、また、集団の行為や重要人物、重要事件に焦点を当てて描写することにより、歴史に対する深い思考に富むように表現することができるし、また積極的な価値基準と未来に対する楽観的な展望をえることができるであろう。系統的な理論の枠組み、独特の解釈モデル、堅実な資料の細部、明晰な歴史の筋書き、十分な価値認識、これらはパノラマ方式の歴史絵巻の血と肉、そして骨組みとなるであろう。

## 注

1. これは王家范先生の言葉を要約したものである（王家范著『百年颠沛与千年往復』、上海遠東出版社、2001年、223頁）。原文は次の通りである。「私たちは長安、汴梁、臨安等の都市の繁華さには程度の差はあれともに病的な特徴があると考え。なぜならば、それらの都市は砂漠のなかに屹立する宝塔のようなものであり、農村経済の正常な発展を自らの確かな基礎となしていないからである。それらは主に専制政権及びそうした政権が強制的に維持してきた畸形の分配構造つまり、特権階級の奢侈的で消費性の高い生活に支えられている一に依拠しており、社会全体の発展に対して、消極的な作用の方が積極的な作用より大きいからである」。
2. ピーター・M・ブラウ著、間場寿一・居安正・塩原勉訳『交換と権力—社会過程の弁証法社会学—』新曜社、1974年）。原書は、Peter M. Blau, *Exchange and Power in Social Life*, New York: John Wiley & Sons, 1964.
3. クロード・レヴィ＝ストロース著、馬淵東一・田島節夫監訳、花崎皋平等訳『親族の基本構造（上・下）』（番町書房、1977・1978年）。原書は、Claude Lévi-Strauss, *Les structures élémentaires de la parenté*, P.U.F, Paris, 1949.
4. マックス・ヴェーバー著・清水幾多郎訳『社会学の根本概念』（岩波書店、1972年）。また、浜井修著『ウェーバーの社会哲学—価値・歴史・行為』（東京大学出版会、1982年）を参考にした。
5. 筆者が参照したのは、以下の文献である。路易斯・亨利・モル根著『美洲土著的房屋和家庭生活』（李培棻訳、中国社会科学出版社、1985年）、林耀華『金翼—中国家族制度的社会学研究』（莊孔韶等訳、三聯書店、1989年）、陳国霜著『華人幫派』（葉長青等訳、台北、巨流図書公司、1995年）、ミシェル・マフェゾリ著『小集団の時代—大衆社会における個人主義の衰退—』（古田幸男訳、法政大学出版局、1997年）、イーファー・トゥアン著『個人空間の誕生—食卓・家屋・劇場・世界』（阿

部一訳, せりか書房, 1993年), 莊孔韶著『銀翅—中国的地方社会与文化变迁』(三聯書店, 2000年)。

## Three Problems on Writing the History of Shanghai Urban Social Life

Hang QIAN

( translated by Toru INOUE )

For a long time, scholars of Chinese Social History have obtained rather plentiful achievements in rural studies and all kinds of related problems. But the research on urban issues is relatively weak. Therefore a book 〈History of Shanghai Urban Social Life〉 written on this is of great academic value. Through the comprehensive studies in this special area, we should try to honestly unfold the “Shanghai character” and “Urban character” in history and the future. The theoretical methods, narrating pattern and the use of information can also provide new experiences for the research of Chinese Social History.

Keywords : Shanghai, Shanghai people, urban, social life, history